

# ASD のコミュニケーションにおける意図の問題

— 意図理解・調整・参照 —

松本 敏治<sup>[1]</sup>, 菊地 一文<sup>[2]</sup>, 清野 宏樹<sup>[3]</sup>

[1] 教育心理支援教室・研究所ガジュマルつがる, [2] 植草学園大学発達教育学部, [3] 北海道釧路養護学校

本稿の目的は, ASD のコミュニケーションの問題について意図の側面から理論的検討を加えることである。松本らは, 青森県津軽地方の発達障害にかかわる人々の間に存在する「自閉症は津軽弁を話さない」という噂をきっかけに, ASD の方言使用の問題を検討してきた。調査の結果, ASD の方言不使用との印象が全国で認められる普遍的現象であること, および方言語彙の不使用が確認された。ASD に見られる方言の不使用については, 幼児期においては意図理解の不全がその背景に存在し, より年長になっては他者との心理的距離の理解が難しいため共通語と方言の使い分けができていないとの解釈を導き出した。さらに, コミュニケーションにおける意図理解および意図の交換が果たす役割について言及し, 方言不使用を含む ASD のコミュニケーションの問題を意図理解・調整・参照の側面から検討を加えることの重要性を指摘した。これらの指摘をうけて, 1) 意図の定義, 2) 意図の認知的実在: ミラーニューロン, 3) 意図理解・調整・参照の観点からコミュニケーションにおける意図の問題を整理する。

**キーワード:** ASD コミュニケーション 方言 意図理解 ミラーニューロン

## 1. ASD の方言使用に関する研究の経緯

### 1.1 質問紙調査及び理論的検討

青森県津軽地方の発達障害に関わる人々の間には, 「自閉症は津軽弁を話さない」という噂が存在する。松本らはこの噂をきっかけとして, 自閉スペクトラム症 (ASD) の方言使用について, 全国八ヶ所 (青森・秋田・京都・舞鶴・高知・北九州・大分・鹿児島) および国立特別支援教育総合研究所の研修に参加している教員に対してアンケート調査を実施した (松本・崎原, 2011; 松本・崎原・菊地・佐藤, 2014)。その結果は, 定型発達 (TD), 知的障害 (ID) に比べて, ASD の方言使用が少ないとする印象が全国で共通してみられることを示した (図 1)。さらに, 青森および高知の特別支援学校において, ASD と ASD を有しない児童生徒 (non-ASD) の方言語彙使用について調査を行った。その結果は, ASD が non-ASD に比べて方言語彙を使用しないこ

とを示した (表 1, 表 2)。

結果について学会・研究会等で報告したところ, 次のような解釈が提出された。1) プロソディ等の自閉症の持つ音声的特徴のため, 2) 北東北の方言の音声的特徴が ASD にとっては処理が難しいため, 3) 方言のもつ声色や身ぶり等の特徴 (パラ言語) を示さないため, 4) 対人的社会的意味を含むことの多い方言終助詞を利用していないため, 5) ASD はメディアからことばを学習しているため。しかし, 1～3) の説では, ASD の方言語彙の不使用を説明できない。また, 方言語彙の不使用は, 終助詞にとどまらないため, 4) の解釈も不十分であった。5) の ASD はメディアから言語習得をしているとする説は, ASD がメディアからの言語習得を優先する理由を明示できなければ説明としては不十分と考えられた (表 3)。

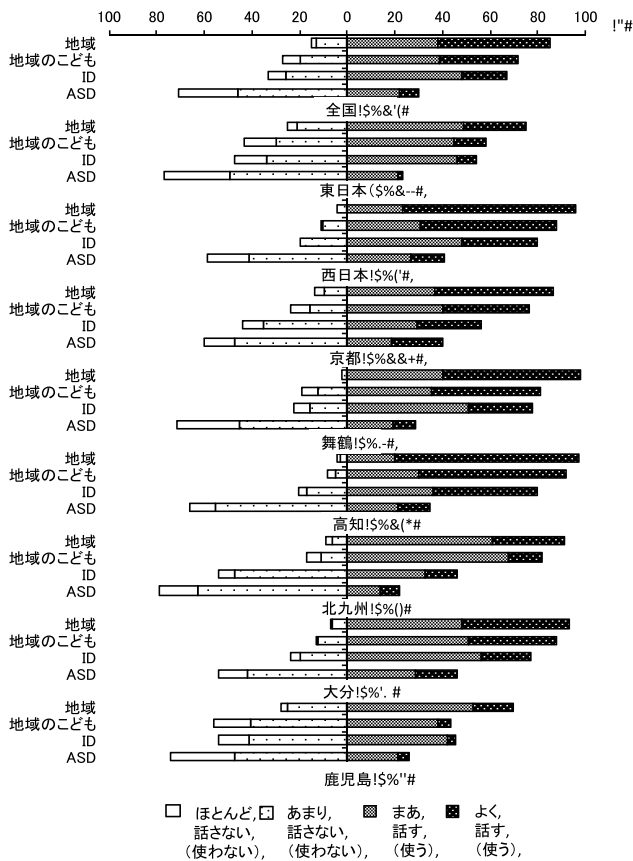


図1 地域の子ども, ID, ASDの方言使用についての評価 (松本 (2014) より)

表1 青森のASDおよびnon-ASDの方言語彙使用の比較 (松本・崎原 (2011) より)

障害	人数	津軽弁		共通語			
		使用人数 <sup>1)</sup>	総使用語数 <sup>2)</sup>	平均使用語数 <sup>3)</sup>	使用人数	総使用語数	平均使用語数
ASD	20	4 (25%)	6	1.50	20 (100%)	326	16.30
Non-ASD	26	13 (50%)	119	9.15	26 (100%)	475	18.27

1)  $\chi^2$  検定:  $p < 0.05$ , 2, 3) Mann-Whitney:  $p < 0.05$ ,

表2 高知のASDおよびnon-ASDの方言語彙使用の比較 (松本・崎原・菊地・佐藤 (2014) より)

障害	人数	高知弁		共通語			
		使用人数 <sup>4)</sup>	総使用語数 <sup>5)</sup>	平均使用語数 <sup>6)</sup>	使用人数	総使用語数	平均使用語数
ASD	26	14 (54%)	80	3.08	21 (81%)	148	9.83
Non-ASD	18	17 (95%)	218	12.11	17 (95%)	228	2.67

4)  $\chi^2$  検定:  $p < 0.01$ , 5, 6) Mann-Whitney:  $p < 0.01$

表3 ASDの方言不使用についての仮説と説明可能性

仮説	方言の特徴	
	語彙	音声的特徴
音韻・プロソディ (表出)	—	○
音韻・プロソディ (受容)	—	×
終助詞意味理解不全	△	—
パラ言語理解不全	—	○
メディア影響	?	?

松本・崎原・菊地 (2013) より

このような中で、方言学者である佐藤から、方言の社会的機能にもとづく解釈が提出された (松本・増田・佐藤・崎原, 2011)。方言には次のような社会的機能がある。1) 帰属意識の表明機能, 2) 連携意識の表明機能, 3) 感情の表明機能, 4) 他者との差異化機能, 5) 緊張の緩和機能。そして相手との心理的距離や状況によって共通語と方言の使い分けがなされる (佐藤, 1997; 佐藤, 2002)。方言がもっとも強く使われるのは家族や親しい友人との会話であり、見知らぬ人や公的な場では共通語的な話し方になる (月刊言語編集部, 1995)。ことば遣いは、相手の心理的距離に合わせて心理的に快適なものが選ばれ、対人関係調整機能をもつ (Brown & Levinson, 1987; 宇佐美, 2002; 吉岡, 2011)。方言の使用は、相手や場面によってグラデーションのように変化し、心理的距離を表明・調整する。現代では、方言は乳幼児期にとって家族が主に使用するという意味で自然言語 (母語) であったとしても、年長では複数の表現様式のうちのひとつとなる (松本, 2017)。ASDは対人的・社会的障害を主障害とするため、方言のもつ社会的機能を理解し使用することに困難を抱える。方言を使用したとしても、相手や場面・状況に応じたことばの遣い分け (共通語・方言) をすることは難しいであろう (松本・崎原・菊地, 2013; 松本, 2017)。

### 1.2 幼児期における方言使用に対する疑問

しかし、青森県津軽地域での「自閉症は津軽弁を話さない」という噂は、乳幼児健診に関わる心理士・保健師においても広まっていた。また小枝 (2007)、木村 (2009) は ASD の幼児期の特徴の一つとして方言の不使用を報告している。青森県津軽地域の保健師に行った調査からも、ASD の子ども (3歳6ヶ月)

が方言を使用しないという印象があることが確認された(松本, 2016)。幼児期においてTDが方言を使用し, ASDが方言を使用しないとすると, 方言の社会的機能仮説からの解釈には無理が生ずる。この説では, 帰属意識や仲間との連携意識等を推定し, 人は相手との心理的距離に応じてことばを使いわけていると見なす。しかし, TDであったとしても3歳幼児が帰属意識や連携意識等を理解してことばを使いわけていると捉えるには無理がある。

松本・崎原・菊地(2015)は, 言語習得期における方言不使用について次の解釈を提出している。方言主流社会の子どもにとって方言は自然言語である。しかし, 現在の方言主流社会の家庭では, 子どもが日々視聴するメディアからは共通語が, しかも話の専門家である俳優・声優・アナウンサーが話す共通語が流れてくる。子どもたちは, 周囲の人々が話す方言と, メディア等で使用される共通語という2つのことばに曝されている。このような状況の下, TDは自然言語としての方言をASDはメディア等で使用される共通語的な話し方をする。松本・崎原・菊地(2015)はTDの子どもが家族の真似もテレビ・映画のキャラクターの真似も可能であるのに対して, ASDでは家族の真似は困難だがテレビ・映画のキャラクターの真似が可能という現象(Le Coutrur, 2013)を手がかりにASDの方言不使用について次のように解釈している。言語習得では相手の心的状態の理解, 特に意図理解が重要な役割を果たす(Tomasello, 2003)。TDの子どもは, 共同注意, 意図理解, 他者を自己化(同一視)することを通じて周囲の人々のことばを学んでいく。一方, ASDはこれらに困難をもつため周囲の人々が使用することば(方言)の習得が困難になる。しかし, くりかえし視聴するメディアからのことば(共通語)を発話者の意図理解が不十分なままに連合学習的に学ぶことになる。この考察に基づき, 松本・崎原・菊地(2015), 松本・崎原・菊地(2013)は言語習得として次の2つの過程を提案している。一つは, “他者とのやり取りの中で相手と注意を共有し, 意図を読み取り, 他者をモデルとしてその人を自分の中に取り入れるように言葉や表現法を学んでいく”過程, もう一つは“機械的あるいは連合学習的にことばを学んでいく”過程。TDは両者の過程を通じて言語

習得するが, ASDでは前者の過程に困難を抱え後者の過程が優位となる。

### 1.3 事例検討から

松本・崎原・菊地(2015)の提出した上記の解釈を支持するものとして, 家族全員が関西方言を話すにも関わらず本人のみ共通語を話す青年の事例がある(松本・崎原・力石・藤原, 2015; 松本, 2017)。この青年は, 幼児期には次のような特徴が見られた。保育園では, 一人で部屋の隅で電車を走らせ, 名前を呼んでも振り向かず, 言語発達にも遅れがみられ, 5歳の時に「自閉症」という診断を受けている。要求がある時には母親のところにくるものの, それ以外は自分の遊びに没頭していた。(ピアノを弾いてほしいと)母親に要求する時には, ピアノの方に母親の手をもっていくというクレーン現象が見られた。周囲の人々の話しかけには興味がなく, 家族の感情や気持ちを読み取る様子も見られず, 対人関係に大きな困難を示した。家族の行動やことばの模倣は青年期に至るまでほとんど見られない。保育園で行ったごっこ遊びにも参加できず, 自発的に人物の真似をするごっこ遊びは幼児期には見られない。しかし, 3歳後半から自発的にあそびの中にビデオ(DVD)の再現を繰り返すようになった。そして, ビデオ(DVD)のセリフを実際の場面に当てはめて使用するという様子が見られた。このような反応は増え続け, どのビデオからの流用か母にとってさえわからないほどのバリエーションを持つに至った。母にとっては, なおく自分のビデオ(DVD)の記憶のストックの中から一瞬にして引き出して言っている>と感じられる。このような言語習得は, 自閉症児において時にみられるものであり, ドキュメンタリー映画「ぼくと魔法の言葉たち」の主人オーウェンはディズニーアニメの視聴を通してことばを学びその中のセリフを場面に使うことで他者とのコミュニケーションを発展させている。

ASDが示すこのような言語学習には, 彼らが抱える注意の問題も関わっていると思われる。言語習得には, 他者が注意を向けているものに自分の注意を向けたり, 自分が注意を向けているものに相手の注意を誘導したりする共同注意が重要な役割を果たす(Tomasello, 2003)。ことばを学ぶ上で注意す

べき情報はその場のさまざまな情報の間に隠れている。適切な情報に注意をむけるには、他者の注意を自らモニターすることが重要となるが、ASDにおいては共同注意に弱さが見られる。療育機関や学校等での指導環境では、提示される情報は事前に指導者や教師により選択・整理されている。アニメ・ドラマにおいては、注目すべき情報が強調される演出がなされている。主人公の表情のアップや、場合によっては話している人物の表情が交互に映し出されたりする。テレビ番組は、定点観測の監視カメラとは異なり、演出する側が視聴者に見て欲しい情報を選択している。主人公の姿・表情・動きだったり、物語にかかわるその他の人や物であったりする。表情や身振りに着目することが少なく、社会的に適切な注意ができていないASDにとって、他者による情報の選択は場面とことばの関係やそのパターンを発見する上で助けになっていることが考えられる。

## 2 コミュニケーションにおける「意図」の問題

### 2.1 意図読み・意図調整（働きかけ）・意図参照・伝達意図の理解

さらに松本（2017）は、ASDの方言不使用の背景要因の1つとして、コミュニケーションにおける意図の重要性も指摘している。他者にある行為を行わせた時、例えば座らせたい時に「座って」と声をかけたとする。たとえ、そのことばの語調がどれほど強圧的であったとしても、座る行為を行なうのは聞き手であり、聞き手が“座る”という意図を持たない限り座ることはない。人は、相手も自分も意図をもった人間であると認識して、互いに意図読み・調整（働きかけ）・参照・伝達意図の理解を行っている。ASDとTDの間には、意図理解のみならず（発達障害支援のための評価研究, 2013）、調整（働きかけ）・参照・伝達意図の理解に関わる部分に差がある。例えば、人に「ジュースちょうだい」と要求をした場合、ASDの子どももTDの子どももこのことばを発する。この時、TDは相手の意図に働きかけながら、相手の意図がどのように変わったか（自分にジュースをあげようとする様子がみられるか）どうか確認する。母親が冷蔵庫のドアに手をかければ、それは相手がジュースをくれることを意味する

と理解する。もし、母親が動かない時は、繰り返しおねだりして、相手の意図を変えようとするだろう。一方、ASDの子どもは、相手の意図の読みとりや相手の意図への働きかけも弱く、相手の顔を見て“甘えたようすで、自分の要求を聞いてもらおう”とする表情・身振り・声・視線などを用いることは少ない（松本, 2017）。

ASDは他者を、意図をもった存在とみなし、その意図を読み、意図に働きかけることに弱さが見られる（松岡・小林, 2000）。

### 2.2 意図は必要か

他者との関わりにおいて意図理解は重要な問題であり、幼児や類人猿等においても研究がなされてきたし、近年では対人的場面に活用する目的のロボットに意図理解機能を組み込むための研究が行われている（開, 2014）。他者の行動を理解する上で、意図という観点は何ぞ必要なのだろうか。

長崎・中村・吉井・他（2009）は、次のように述べている。我々の行動の多くは、「欲求 (desire)」と「信念 (belief)」で説明できるようにみえるが、実際に行動するにあたっては、目標にむけて、プランを試みて、さまざまな調整をおこなう必要がある。映画を見たい（欲求）とその映画が映画館でやっている（信念）があったとしても、自分のスケジュールを調整したり、二人でいくのであれば二人の時間を調整したりする等が必要となる。このような心的機能は、＜欲求-信念＞では説明できず、我々の日常の行為の説明には、“目標のために、未来を志向してプランを立て、調整するといった心の働き＝「意図 (intention)」”という観点が必要であるとする。

また、このことは、人間の行動のスタートはなにか、という疑問と関わっている。行動の開始点を感覚刺激と捉える見方“感覚運動モデル”と、人間の行動の開始点を「意図」とする見方“観念運動モデル”がある。感覚運動モデルは、人間の行動の開始点を、なんらかのかたちでの感覚刺激とみなし、刺激への反応としてのみ行動が生起するとする。一方、観念運動モデルでは、自発的な行動に先立って達成すべきことを思い描いており、人は行動の結果をイメージしながら行動をしている。目標を思い描くこと（心象）が行動を引き起こし、これが成立するためには

以前に自分の行動の結果を学習したことが必要となる。つまり、ある目標の心象と行動を関連させることができることで、それは自分の中の意図（目標と行為）として獲得されたことになる (Iacoboni, 2008)。

人は他人と関わる時に、自分の中にも相手の中にも意図を想定してコミュニケーションをとっている。目標と行為をセットとして捉えることができるからこそ、他人の行為を見てその目標を理解することができる。例えば、妻が立ち上がったのは「マヨネーズを取りに行ったのだな」等といったように、行為の背景には意図が存在するとの前提で他者の行動を理解する。しかし、他者の意図の存在は推測でしかない。このような観点をを用いることなく一感覚運動モデルのように一人の行動を説明できるのではないかとの考えもありうる。そこで、次にミラーニューロン研究について述べることで、意図（理解）が原初的な認知であることを示すこととする。

### 3. ミラーニューロン研究から「意図」を捉える

意図の存在について、脳科学特にミラーニューロンの研究が興味深い資料を提供している (Rizzolatti & Sinigaglia, 2006)。ミラーニューロンは、行為者が運動を行った時にも、他者が同じ運動を行っている時に活性化されるニューロンである。このミラーニューロンのもっとも重要な点は、他者の行動の目的に応じて反応することである (藤井, 2010)。Iacoboni (2008) は、ミラーニューロンが“行動の背景にあるもっとも深い動機、すなわち別の人間の意図を認識させ、理解させている”と述べている。ミラーニューロンは、運動を司っていながらも外部刺激、しかも他者が同じ運動をするのを観察した時に活動する。運動ニューロンは、脳から運動へ向かうもの(遠心性)と考えられてきた。ところが、ミラーニューロンは運動ニューロンでありながら、他者が同じ行動をしているのを見たときにも活動する。それまでは、感覚ニューロンは入力系、運動ニューロンは出力系という、刺激入力→中枢神経処理→出力という見方で考えられてきたが、ミラーニューロンは出力系であるにも関わらず入力系でもありうる。ミラーニューロンは最初にマカクザルで見つかった。典型的なミラーニューロンは、次のような活動

を見せる。実験者がトレーから食べ物(餌)を取り出しているところをサルが観察する。この時、サル(同じ運動をするときに活動している)運動ニューロンが活動する。そして、この神経活動は、行為が終わる(餌を取り出す)まで続く。ミラーニューロンは食べ物等の視覚刺激によっては活動せず、発火するのは対象物への働きかけに対してである。実は、“対象物への働きかけ”という点が興味深く、そしてミラーニューロンの最も重要な点である。ミラーニューロンは、動作そのものに対して活動するわけではない。実験者が同じ動作をしているのを観察しても、トレーの中に餌が入っていない時には活動しない。実験者の手が食べ物に近づいてつまみ上げるような形をとった途端にニューロンは活性化しはじめ、この行為が完結するまで続く。このニューロンは食べ物等の視覚刺激によっては発火しないし、パントマイムのような対象物のない動きでも発火しない。発火が起きるのは、対象物に対して行う行為についてだけである。「餌を取ろうとする手の動き」に反応しているのであって、「(ある)手の動き」に反応しているのではない。このような事実から、研究者たちは、ミラーニューロンは観察された行為の意味を反映している、と見なすようになっている。その意味では、ミラーニューロンは目標と動作の両方に反応するニューロンと考えられる。人の場合も、他人の行為をみることで、その行為のプランと実行に関わる運動野のミラーニューロンシステムが活性化される。ミラーニューロンシステムこそが動作を単なる動きではなく、私達が他者の行為を目的指向的な観点から理解できるようにしているとの指摘もある。

では、ミラーニューロンは意図(行為の目標)の識別にも関わっているのか。これを明らかにした実験として次のものがある (Fogassi, Ferrari, Gesierich et al., 2005)。条件1では、サルは食べ物をつかんで口にもって行って食べる。条件2では、サルは条件1の食べ物と同じ場所にある食べ物ではないものをつかんで箱に入れる。この時、箱は口の側にあるので、運動としては条件1と同じである。運動としては似ているが、この条件間では大半のニューロンで発火に違いが見られた。そして、こんどはこのサルが同じ状況を見た時にどうなるのかを

調べた。実験者が、条件1と条件2の動作をやってみせる。容器があるかないかで次の動作（口に入れるか、箱にいれる）が予測できるようになっている。実験者の意図（口にいれようとするか、箱にいれようとするか）でミラーニューロンの発火には違いが見られた。そして、観察したときのニューロンの発火のパターンは、自分がつかむときの発火パターンとそっくりであった。自分の中での意図の違いが、ニューロンの発火パターンの違いを反映し、さらに、他人の意図の違いがおなじニューロンの活動によって識別されているということになる。また他人の意図の読みと関係の深い実験を紹介しよう。ここではサルは、実験者がすることを観察する。この時、いくつかの条件がある。条件Aではサルは実験者の行為（積み木をつまむ）を逐一観察し行為の最後まで見ることができる。条件Bでは、動作の最初の部分は見ることはできるが、最後の段階は衝立で隠れて見えなくしてある。ただし、衝立の向こうに積み木が置かれているのをあらかじめ見ることができる。条件CとDでは、条件はAとBに似ている。ただし、対象物（積み木）がなく単なる動作だけである。結果は、次のようなものだった。行為全部を見られる条件と一部（初期）しか見られないとき（条件AとB）でニューロン活動に差は見られなかった。行為の最終段階が見えなくても、同じ活動を示した。（Umiltá, Kohler, Gallese et al., 2001）このニューロンは運動野のニューロンであるので、サルが行為の一部しか見られないときでも、全体を見たときと同じ潜在的運動行為が生じたことになる。このニューロンは、サルが自分で行うときも実験者が行うのを見るときも、食べ物等対象物をつかむ時に手がその形に変化したとたんに活動しはじめる。このことは、運動活動の最初の段階から行為の意図がコード化されていることを意味する。さらに、人についての研究では、文脈によってミラーニューロンの活動が違うことが報告されている（Iacoboni, Molnar-Szakacs, Gallese et al., 2005）。コーヒーカップをつかむ動作をみたとしても、それが綺麗に揃えられた食器や食べ物の間にあるときと、食べ散らかされた食卓の上にあるときで、反応が違っている。これは、行為をコード化するだけではなく、どのような意図でその行為がなされたかもコード化できていると考えら

れる。そして、おそらくはそれに続いて起きそうな行為の予測とも関連しているであろう。

ミラーニューロンの研究は、他人の動作をみると自分の中の同じ動作と関わる運動ニューロンが活動することを報告している。しかも目的指向的に他人の動作を把握しているらしく、同じ動作でも餌を取るときとそうで無いときで反応が異なることを示している。ミラーニューロンは、サル（人も含めて）が、ある場の状況でなされた行動の観察から、目標とプラン（一連の行動）を一つのものとしてコード化していることを示している。サルは、人が餌に手を伸ばし始めているのを見ただけで、その目的までコード化しているのである。サル（のミラーニューロン）は、ある状況・文脈の中で行われた行動（の一部）を観察しただけで、その最終的な目的を理解できる。長崎・中村・吉井他（2009）の言うように意図を「目標とそれに向けたプランと調整」と考えるなら、サルはプランに基づいて行われた行動の一部（手の動き）からその目標をコード化できたことになる。

ここまで紹介したミラーニューロン研究は、意図あるいは意図理解が高次の認知的推論ではなく、マカクサル等の種においても存在する原初的認知としても存在すること、及び、意図自体の認知的実在を表す証拠と考えることができる。

#### 4. 意図理解・調整・参照・伝達意図理解の検討

##### 4.1 意図理解

###### 4.1.1 2つの意図理解

私達が意図を読むという場合、少なくとも2つの意味で使っている。一つは、上述のミラーニューロン研究でみられたように動作を見ることで、その動作を含む一連の動作の流れ（プラン）と目標を理解する事、もう一つは相手が提示した目標からそのあと行われる一連の動作（あるいはその人が考えているであろうプラン）を推測することである。

ここでは、意図の中の「目標とプラン」の部分に焦点をあてる。我々は、ある目標に向かって行動のプランを立て、それに基づいて行動をすると仮定する（観念運動モデル）。プランによって時系列にそって行動が表出する。他者によって観察可能であるの

は、その時の状況・文脈とそれまで本人が示した行動（言語も含む）である。他者はこれらの情報をもとに現在本人が行っている動作の目標とこのあとの彼の行動、つまり背景にあるプランを予測する。他者の動作からその目標を推測することは、日常生活において頻繁に行われるものである。例えば、スーパーマーケットでカートを押している時に、向かいから来た人の視線や身体の向きからその後の動きを推測して衝突を避ける。より複雑な状況としては、次のような場面が考えられる。居酒屋で仲間と飲んでいるとする。あなたは、座敷の一番廊下側（三和土（たたき）側）に座っていた。隣（奥側）の同僚が、身体を前に傾けて腰を浮かした。それに気づいたあなたは、”トイレかな”と思って、三和土に降りて同僚が出やすいようにした。この時、貴方は、その同僚が「三和土に降りる→トイレに行く→また戻ってくる」と予測していることとなる。同じ場面でも、隣の同僚と向かいの上司が議論を始めて激昂した同僚が腰を浮かした状況なら、あなたは三和土に降りたりしないだろう。我々は、日常生活の中でさまざまな場面で他者の行動から意図（目標とプラン）を読み取って対応している。

2番目は、目標からのプランの予測である。先ほどの例であれば、「ちょっと、トイレ」ということばがあれば、その後のプランを予測することができる。この場合は、目標が言語的に提示されたことで、その目標と対になったプランを読み取る。目標しか伝えていないが、この状況からその後の行動が予測できる。

また、人は相手が自分の意図を読めることも期待している。スーパーマーケットの例であれば、カートの動き等で自分がどのように動くつもりであるかを相手に知らせようとする。居酒屋の場面では、「トイレに行きますから、そこを通してください」と敢えて言わなくとも、「ちょっと」や「トイレ」あるいは身振りを示すだけで、自分の目標とプランを推測できることを期待する。

#### 4.1.2 意図のレパトリー

目標とプランを読み手自身が持っている（あるいは知っている）からこそ、状況と動作からその後の行動と目標を予測できる。ある意味では、文脈や状況の中で他者が示した行動から自分がもっている意

図（目標とプラン）のレパトリーと照合し合致するものを導き出したとみなせる。意図を読むためには、自分自身がそのような意図を有している必要がある。もし、相手の意図が自分の意図レパトリーに適合するものがない場合は、どうなるだろう。昔の日本人には、チップという習慣というのは馴染みないものであった。海外旅行でレストランでの食事の後、相手が財布を開いてゴソゴソと小銭を探しはじめました。チップという知識（意図レパトリー）がなければ、財布を開いて小銭を捜すという行動はレジでの支払いのためと誤解されるだろう。人は、ある状況での他人の行動を見た時に、そこに意図を読み取ろうとする。基本的には、自分の意図レパトリーに従って相手の目標とプランを理解しようとする。少なくとも自分の意図レパトリーに近い形で、相手の意図を読み取ることになる。

となると、意図理解とは、ある文脈における行動を手がかりに自分の中にある（該当する）意図を活性化させることとも言える。そして、自分の中で活性化された意図（目標とプラン）を（おそらくは）相手ももっているとみなしている。

#### 4.1.3 意図を読めているとわかるのは？

では、人が他人の意図を読めている、読めていないという判断はどのようになされているのだろうか。居酒屋の場面なら、隣の上司が腰を上げた途端にサッと立ち上がって、席をあげれば意図が読めたことになる。あるいは、腰を浮かした相手に身体を壁につけて通れなくしてニヤッと笑ったとしても意図を理解した上での悪ふざけだろう。その意図遂行を援助するあるいは妨害する行為を行った場合には、意図が読めていることは明らかである。しかし、上司が腰を上げたのに、動かない場合、上司の意図が読めなかったのかといえるであろうか。相手が何も反応しない場合には、意図を読めているかどうかについてはわからない。「気が利かない」と判断されたとしてもそれがこちらの意図が読めないため、自分からどう関わっていいかが分からないためか不明である。

意図を読むというのは、他者との関係性の問題だと考えられる。意図を読まれる側にとっては、相手が意図を読めなくて“気が利かない”のか、意図を読んだけど“気を利かせない”のか、ということは

関係ない。“気が利く”というのは、意図を読まれる側からすれば、相手が自分の意図を読むことを当然だと思っていることを意味する。人は互いのやり取りの中で、相互に意図を読み取るのが当たり前だと思っている。座敷から三和土に立った上司は、自分はトイレにいったということが、周りに読み込まれているだろうということがわかっている。つまり自分の行為は相手が自分の意図を読み取るための手がかりになっていると理解している。これはよく言われている他者視点で自分をみるということと関連しており、ASDでは苦手と言われるものである。

周りの意図の読み込みと、自分が期待した“(周囲による)自分の意図の読み取り”は、多くの場合一致している。相手が援助的な行動(おしぼりを渡す)をすれば、この両者の読み取りについて確認がされる。一方、「タバコですか?」と聞かれれば、相手(周囲)の意図読み取りが間違っていたことが明らかになる。意図を読み取っていたとしても特別に確認がされずに過ぎていくことも多いが、お互いに意図をモニターし合っていることが合意になっている。

#### 4.2 意図調整

前述したように相手に何かをさせたいと思った時に、人は相手の意図に働きかける。家族での食事の時に妻が向かいに座っている夫に「お醤油とってくれる」と依頼する(妻は夫の意図に働きかける)。「醤油をとって私に手渡す」という意図をもってほしいと思っているという意図を妻は持っている。このような「他者の意図の状態に対して人が何かを意図すること」を伝達意図という。「醤油をとって妻に渡す」という行為を行ってもらうためには、夫がそのように意図する必要がある。夫の意図を調整・変更しようとしている。そして、夫が妻の伝達意図を理解するためには、妻の発言に注意を向ける必要がある。注意を向けた上で、その発言の内容は自身の意図への働きかけであると理解し、それに対して諾否を行う。この時、妻は自分の発言を相手が聞いているかを確認する。話しかけに対して、聞いていないと思えば「ちょっと聞いているの?」というであろう。また、相手が自分の提案を受け入れたかどうかについてもモニターし、夫が醤油に手を伸ばせば「あ

りがとう」と言うだろう。相手に意図の変更を提案・依頼して終わりではなく、相手はその意図変更の申し出を理解したか、そしてそれにどう応じるかについて確認を行う。日常生活においては、多くの場合このような意図への働きかけとその確認がなされている。この背景には、先程から述べているように他者は意図をもった存在でその意図に基づいて行動すること、そして依頼されたことを実施するかどうかは相手の自由意志によることを知っているとの認識がある。人は甘えや脅し等、さまざまな社会的スキルを用いて相手の意図を変更しようとする。他者を意図をもった存在として理解しているかどうかは、意図調整の場面においては、表情や身振り声の調子等に現れる。また、依頼に対して相手がそれを受け入れるかどうかを知るために相手の表情や身振り声の調子をモニターする様子にも現れる。相手が依頼を拒否した場合には、相手の意図を変更しようとしてさらに甘え・脅し・拗ね等のスキルを柔軟に使用するかもしれない。

#### 4.3 意図参照

松本(2017)は、「相手の意図を表出するように求めること」を意図参照と呼んで次のような例を挙げた。母親にペットボトルを捨ててくるように言われた幼児が、ゴミ箱の前で立ち止まり、3つの穴(ビン・カン・ペットボトル)の一つに向けて入れる素振りをしながら、母親を振り帰る。母親は、「反対」と言いながらとなりの穴を指差す。このように自分の行動するまえに他者の反応を伺う行動は、一般的には社会的参照と言われる。社会的参照は乳幼児においても見られる。ビジュアルクリフ(視覚的断崖)の実験がその良い例である。実験的に作られた断崖(実際には崖の上にガラス板がはられていて落ちることはない)の向こうにいる母親に1歳の子どもを手招きしてもらう。子どもは母親の方に向かっていくが、そこには断崖が待ち受けている。この時子どもは躊躇し母親の表情を確認する。母親が笑顔やにこやかな表情をしていると安心して母親の方に向かっていくが、悲しそうな顔や困った顔を見せると断崖の前からそれ以上進もうとしない。意図の参照はほぼ社会的参照と同じ現象を指すが、本稿でいう意図参照とは、相手に意図の開示を求める側面に焦点を当て



る。“自己の意図に影響を及ぼしそうな他者に意図の開示を求めること”とする。単に表情を伺うのではなく、相手に意図の表出を求める行動である。相手は、そこで出された表情や身振りから、子どもがこちらの意図の表出を求めていることを理解してその子どもに自分の意図を表情や身振りあるいはことばで伝える。「今日どこ行く?」「何食べる?」「君はこの企画についてどう思う?」等、相手の意図が自分の意図に影響を及ぼしそうな場面で他者の意図の開示を求める。狭い山道で登山者に出会った時に立ち止まることで相手がどちらに避けるのか(意図)を開示することを求めることもある。見知らぬ他人であろうと、自分の意図と関わると判断した時には、その意図を開示することを求めることがある。

#### 4.4 伝達意図の理解

意図理解の特殊なものとして、伝達意図の理解がある。伝達意図とは、前述したように「他者の意図的状态に対して人が何かを意図すること」である。ここでは、意図調整と呼んでいるものである。意図調整の項では、働きかける側からの考察を加えた。伝達意図が相手に伝わるためには、受け手の側が発信者の言動に注目し、内容を理解し、自身の意図への働きであるということが理解できなければならない。発信者の発言「お醤油は?」ということばが自分に向けられた発言であることを認識し、文脈や状況から自身の意図への働きかけであることを理解しなければならない。ASDの人々は、時に発言が自己の意図への働きかけと捉えることが難しく、ことばを文字通りに受けとることが多い。

#### 5. まとめと今後の展望

人が世界(周囲に人々)とやり取りをする時に、相手の意図が読めることは重要である。相手の意図が読めると、行動や発言からその人がこの後どんな行動をしてどんな目標を達成しようとしているかが予測できる。他人が意図していることが、自分が意図していることと関係しているなら、自分の意図を修正したり相手への意図調整を行ったりする必要があるだろう。日々、生活していくため、周りの人の行動を予測するためには、意図を読む(ある行動を

見ただけでその後の行動と目標を予測できることや、目標からその後の行動が予測できる)ことが大切になる。しかし、ASDの場合、意図を読むことが苦手で自分の周りの人々の行動や予測がしにくいと思われる。周囲の世界(人が介在する)は、ASDの人にとって予測が難しい世界かもしれない。また、何にどのように注意を払えばよいかもわからない場合もあるであろう。

著者らは、ASDのコミュニケーションの問題を「意図」の側面から検討を試みており、本稿では「意図」がコミュニケーションにおいてどのような役割を果たしているかについて論考した。今後は、今回の検討をもとにASDのコミュニケーションの特性を意図の側面から検討する実証的研究を行う予定であり、意図チェックリストを作成し予備的研究を行っている(松本・菊地・清野, 2017)。予備的に作成したチェックリストは、意図に限定した項目-1)意図理解, 2)意図調整(働きかけ) 3)意図参照, -と、模倣・ごっこ遊び・言語・社会的認知(共同注意)等の関連項目で構成している。意図読みには、“家族の行動から目標がわかり手伝う”等の「目標の推測」と“言われた目標から具体的プランが推測できる”等の「プランの推測」が含まれる。意図参照には、“これをしてよいかどうかと身振りや目線で他者の意図の産出を促す”等、相手へ意図表出を促す行動が含まれる。意図調整(働きかけ)としては、“他人の気持ちを変更するために甘え・脅し・拗ねる等の方法で、家族の気持ち(感情)や判断を変えようとする”等、意図を他者の意図を変更するための行動が含まれる。特別支援学校に勤務する教員の協力を得て、担任する児童についてこのチェックを行った。対象になった児童は、小学部3学年の児童4名(ASD2名, 発達障害(ADHD)1名, 筋ジストロフィー1名, 全てIDを伴う)であった。意図に限定した項目と、模倣・ごっこ遊び・ことば・共同注意等の関連項目に分けて集計を行った。ASDの男女2名では、女子で意図参照行動が一部みられたものの、意図理解・意図調整の項目では該当する行動は見られなかった。発達障害(ADHD)と筋ジストロフィーの児童では、意図読理解・意図調整・意図参照の項目で該当行動が多く確認された。一方、関連項目については、ASDと発達障害・筋ジスト

ロフィーでとの間には顕著な差はなかった。関連項目のうち、ASD と他の 2 名で顕著な差がみられたものは、“お願い” 行動の後の相手の表情の観察や相手の意向の確認等、意図読み・理解等に関連するものであった。ASD 児間の発達の段階による差があると推察されるが、発達障害と筋ジストロフィーの児童が高い数値を示した結果と比較してみると、ASD の意図理解・調整・参照の困難さが明確になった。この結果を受けて、チェックリストを精査改訂のうえ、特別支援教育教員を対象として調査を実施し、non-ASD と ASD のコミュニケーション上の意図理解・調整・参照における差を明らかにすることを計画している。

## 文献

- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987) *Politeness : Some universals in language*. Cambridge University Press. 田中典子 (監修, 翻訳) (2011) ポライトネス 言語使用における, ある普遍現象. 研究社.
- 藤井直敬 (2010) ソーシャルブレインズ入門<社会脳> ってなんだろう. 講談社現代新書.
- Fogassi, L. Ferrari, P.F., Gesierich, B., Rozzi, S., Chersi F., & Rizzolatti, G. (2005) Parietal lobe: from action organization to intention understanding. *Science*, 308 (5722), 662-667.
- 月刊言語編集部 (編) (1995) 変容する日本の方言. 月刊言語 11 月号別冊. 大修館書店.
- 発達障害支援のための評価研究会編 (2013) PARS-TR. スペクトラム出版社.
- 開一夫編 (2014) 岩波講座 コミュニケーションの認知科学 3 母性と社会性の起源, 岩波書店.
- Iacoboni, M., Molnar-Szakacs, I., Gallese, V., Buccino, G., Mazziotta, J. C., & Rizzolatti, G. (2005) Grapping the Intentions of others with One's Own Mirror Neuron System. *PLoS Biology*, 3, 529-535.
- Iacoboni, M. (2008) *Mirroring People : The New Science of How We Connected with Others*. Picador. 塩原通緒訳 (2011) ミラーニューロンの発見 「物まね細胞」が明かす驚きの脳科学. 早川書房.
- 小枝達也 (2007) 広汎性発達障害・アスペルガー障害. 母子保健情報, 55, 28-32.
- 木村直子 (2009) 幼児健康診査における「発達障害」スクリーニングの手法. 鳴門教育大学研究紀要, 24, 13-19.
- Le Couteur, A., Lord, C., & Rutter, M.D (2013) ADI-R 日本語版解釈マニュアル. ADI-R 日本語版研究会監訳, 土屋賢治・黒田美保・稲田尚子. 金子書房.
- 松本敏治・菊地一文・清野宏樹 (2017) ASD のコミュニケーションと意図 「自閉症は津軽弁を話さない」から意図の問題へ. 日本特殊教育学会第 55 回大会発表論文集.
- 松本敏治・増田貴人・佐藤和之・崎原秀樹 (2011) 自閉症児・者の方言使用について - 『自閉症はつがる弁をしゃべらない』との風聞の検討 -. 日本特殊教育学会第 49 回大会発表論文集, 19.
- 松本敏治・崎原秀樹 (2011) 自閉症・アスペルガー症候群の方言使用についての特別支援学校教員による評定 - 「自閉症はつがる弁をしゃべらない」という噂との関連で -. 特殊教育学研究, 49, 237-246.
- 松本敏治, 崎原秀樹, 菊地一文 (2013) 自閉症スペクトラム障害児・者の方言不使用についての理論的検討. 弘前大学教育学部紀要, 109, 49-55.
- 松本敏治・崎原秀樹・菊地一文・佐藤和之 (2014) 「自閉症は方言を話さない」との印象は普遍的現象か - 教員による自閉症スペクトラム障害児・者の方言使用評定から -. 特殊教育学研究, 52, (4), 263-274.
- 松本敏治・崎原秀樹・力石郁・藤原加奈江 (2015) 自閉スペクトラム症の方言不使用についての解釈 - ビデオ視聴から言語表現を獲得した事例をもとに -. 日本特殊教育学会第 53 回大会論文集.
- 松本敏治・崎原秀樹・菊地一文 (2015) 自閉スペクトラム症の方言不使用についての解釈 - 言語習得から方言と共通語の使い分けまで -. 弘前大学教育学部紀要, 113, 93-103.
- 松本敏治 (2016) 自閉スペクトラム症幼児および定型発達幼児の方言使用について - 青森県津軽地方の保健師への調査から - 弘前大学教育学部紀要, 115, 83-88.
- 松本敏治 (2017) 自閉症は津軽弁を話さない 自閉スペクトラム症のことばの謎を読み解く. 福村出版
- 松岡勝彦・小林重雄 (2000) 自閉症児における「他者意図」の理解に関する研究 - ビデオ弁別訓練による「言外の意味」の理解と汎化 -. 特殊教育学研究, 37 (4), 1-12.
- 長崎勤・中村晋・吉井勘人・若井広太郎 (編著) (2009) 自閉症児のための社会性発達支援プログラム - 意図と情動の共有による共同行為 -. 日本文化科学社. (pp.

- 22-23)
- Rizzolatti, G. Sinigaglia, C. (2006) *SO QUEL CHL FAI: II Cevello Che Agisce e I Neuroni Specchio*, Raffaello Cortina Editore, Milano. 柴田裕之訳・茂木健一郎監修 (2009) ミラーニューロン. 紀伊國屋書店.
- 佐藤和之 (1997) 共生する方言と共通語 - 地域社会が求めることばの使い分け行動 -. 國文學, 42(7), 44-51.
- 佐藤和之 (2002) 人はなぜ方言をつかうのか. 國文學, 47(11), 88-95.
- Tomasello, M. (2003) *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*. Harvard University Press. 辻幸夫・野村益寛・出原健一・菅井三実・鍋島弘治郎・森吉直子訳 (2008) ことばをつくる 言語習得の認知言語学的アプローチ. 慶應義塾大学出版会.
- Umiltà, M.A., Kohler, E., Gallese, V., Fogassi, L., Fadiga, L., & Keysers, C., Rizzolatti, G (2001) I know what you are doing: a neurophysiological study. *Neuron*, 32, 91-101.
- 宇佐美まゆみ (2002) ポライトネス理論と対人コミュニケーション研究. 日本語教育通信 (42), 6-7.
- 吉岡泰夫 (2011) コミュニケーションの社会言語学. 大修館書店, 18.

**Abstract****Intention in Communication of Individuals With ASD:  
Intention Understanding, Intention Adjustment, and Intention Reference**Toshiharu MATSUMOTO<sup>[1]</sup>, Kazufumi KIKUCHI<sup>[2]</sup>, Hiroki SEINO<sup>[3]</sup>

[1] Gajumaru Tsugaru: Institution of Support for Individuals with Developmental Disabilities

[2] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

[3] Hokkaido Kushiro special needs school

The purpose of this research was to conduct a theoretical study on Autism Spectrum Disorder (ASD) communication problems from the aspect of intention. Matsumoto et al. studied the problem of ASD dialect use, triggered by rumors that “people with ASD do not use Tsugaru dialect” by experts in Tsugaru district, Aomori Prefecture. As a result, it was found that the image of dialect non-use in people with ASD was a nationwide phenomenon, with the non-use of the dialect vocabulary among them. Moreover, regarding the non-use of dialects in people with ASD, we interpreted the reason for this to be that it is difficult for them to learn the local dialects, which their families speak, in early childhood because of a failure to understand background intention, and they could not use standard Japanese and local dialects on appropriate occasions when becoming older, because of failure to fully understand the psychological distance with others. Furthermore, we focused on the role of intention understanding and the exchange of intentions in communication, and pointed out the importance of examining the problem in communication for people with ASD from the viewpoint of intention understanding, reference and adjustment. In this paper, based on these points, we organized the problems of intention in communication from the perspective of 1) intention definition, 2) cognitive reality of intention: mirror neurons, 3) intention understanding, intention reference and intention adjustment.

**Keywords:** ASD, Communication, Dialects, Understanding Intention, Mirror Neuron